

近藤誠

週刊新潮

がん報道を

論破する



「医学界では、積極的な医療を行う場合の証明責任は医療を行う側にあるとされています。たとえば、欧米で肺がん検診を導入するか決める前にランダム化比較試験をおこなったのも、それゆえです。結果は無効だったので、導入していません。新薬などでも同じ事。効果が明確に示されなければ認可されたいでしょうか？」

この点、手術に関しては日本でも欧米でも、有効性を証明しないまま医療現場に導入され、今まで続いて

きたという歴史があります。しかし、だからといって、根拠やメリットが証明されていない手術を続けることは許されません。手術にメリットがある」というなら、その証明責任は手術医にある。そして大場さんはそちら側に立っている」

こう語るのには自らも医師でありながら、医療のタブーを指摘しつづけてきた近藤誠氏である。

週刊新潮九月三日号に、「批判されて反論でもがん放置『近藤誠』医師の7つ

本誌は先月、近藤誠氏とその「がんもどき理論」に異を唱える大場大氏の二人の医師の対談を掲載した。大場氏はその場で反対する医学的根拠を示せなかったが、その後、対談とは「前提条件」を変え、近藤誠氏を批判している。決着をつけるべく、近藤誠氏が再反論する。

の嘘」という特別説物が掲載された。筆者は東京オンコロジークリニックの大場大院長だ。

近藤誠氏と大場氏は、本誌八月十三・二十日合併号において「がん放置療法」は正しいのか? という対談を行ったばかりだった。二人の医師が本誌で対談を行うにあたり、事前に取り決めた約束事があった。

〈対談で触れなかった話題やデータを編集段階で付け加えない。対談時に話していない言葉も加筆しない〉というものだ。これは「言った言わない」の水掛け論と「後出しジャンケン」を防ぎ、フェアな議論を成立させる為の約束だった。双方ともに納得し、対談は二時間半に及んだ。双方

方の原稿チェックも済ませた記事は掲載された。だが今回の新潮の記事で大場氏は、面と向かって言わなかったことを持ち出して、延々と近藤誠氏を批判しているのだ。

その詳細を見る前に、まずは近藤誠氏の主張をおさらいしておく。

近藤誠氏と言えば「がんもどき理論」だ。いわく、本物のがんはどれだけ早期に発見しても既にその段階で転移が起きているので、手術は無駄。がんもどきの場合には転移しないからこちらも手術は必要ない、と

いう理論である。他に「抗がん剤は副作用などでかえって命を縮めるリスクがある」ということも主張してきた。

「抗がん剤は臓器を傷めて命を縮める副作用があるため、僕は投与に反対の立場です。ただ、抗がん剤は白血病など血液のがんには有効な場合もある。また、大きな乳がんのケースだと、

若い女がら帝京ホテルタワーにクリニックを構える大場氏(円内)。本誌2015年8月13・20日合併号(左)と「週刊新潮」同9月3日号



投与でがんが小さくなって乳房を残す手術が可能になる事もある。大場氏も勘違いしていたようですが、僕はこうしたものを除く『重大な自覚症状のないすべて』の固形がん(注・胃がん、肺がんなど、かたまりを作るがん)は放置した方が長生きする』と主張してきたのです」

最近では日本だけでなく欧米でも問題になって、「過剰診断」も、長年に亘り近藤氏は指摘してきた。「早期診断やがん検診も無意味だと確信しています。近年では内視鏡検査やがん検診が盛んになったため、胃がんや子宮頸がんの発見数は一九七〇〜八〇年代と比較すると非常に増えています。ところががんによる死亡数はほとんど変わっていない。僕のセカンドオピニオン外来にも、八十歳から九十歳と高齢なのに検診を受けて早期がんと診断された方がたくさん来ます。彼らに本当に手術が必要なのではないか? 手術をしても助からないと運命づけられた、転移が潜んでいる

人の数は昔から一定なんです。それはいくら早期診断しても減ることはない。過剰診断により患者が、生み出されている。何よりの証拠だと思ふ」

こうした近藤氏の見解は医療不信の受け皿として、がん患者や一般読者から熱く支持されてきた。

一方で医療界からの風当たりは当然強い。

「一九八八年、慶應大学の放射線科に勤務していた時『乳がんは切らずに治る』という論文を発表した次の

大場氏が言葉で詰める。ノー／も

そんな二人が本誌で対談したわけだが、その直後に大場氏は週刊新潮で、新しい条件や話題を持ち出して、「後出しジャンケン」で近藤氏を批判したのだ。

たとえば、対談では早期診断が有効か無効かを巡って、末期の大腸がんを思い今年五月に惜しまれながら亡くなった俳優の今井雅之さんのケースを取り上げた。近藤氏の見解をまとめる

日から定年退職した昨年春まで、慶應の医師から私の放射線治療外来に患者が回って来ることはただの一度もありませんでした」

書店には「近藤誠批判本」が何冊も並ぶ。大場氏も今年八月に新潮社から同種の本を上梓している。外科医と腫瘍内科医というキャリアを持ち、金沢大学医学部卒業後はがん研有明病院や東京大学医学部附属病院の肝胆脾外科に勤務。現在はセカンドオピニオン外来を手掛けている。

「もつと早期に見ても転移があったはずで、治ることはなかった。がんが手遅れで見つかるとは、早期発見を目指す検診が無意味の証拠である」

これに対して、大場氏は対談ではこう反論した。

「転移には時間軸が必要。一ミリくらいの(小さな)がんが、既に転移を起しているというのは仮説に過ぎない」

ところが新潮では、対談

時には議論していない、アナウンサーの逸見政孝さんのケースを例示している。「逸見氏は検診を定期的に受けていても死を避けることができなかった、だから胃がん検診は無意味だというのが、彼(近藤氏)の主張です。」

しかし、逸見氏の患ったスキルス胃がんは、早期の時点では見逃されることがあり得る。(略)

(略)だからと言って『早期発見が不可能』ということではありません」

また、大場氏は新潮の記事で対談時の発言を「修正」する事で自らの立場を補完している様子もある。

対談で「早期胃がんを発見して手術をしたから寿命が延びたという、確としたエビデンス(医学的根拠)はお持ちですか?」という近藤氏の問いに対して、「手術をしないで放置した患者さんと、手術した患者さんを長期に追跡した時に、生存利益として手術が勝るデータがあるかという事をおっしゃってるんですか? それは現実的ではな

いですし、比較試験としては存在しないと思います」と大場氏は回答した。つまり、「手術をしたからがん患者の寿命が延びた」というデータが存在しない事を認めている。さらには「エビデンスを得る事は不可能」とも語っていた。

だが新潮では次の様に前提条件を、加筆している。「医学で言うところのエビデンスとは、『ランダム化比較試験』(第Ⅲ相試験)という臨床研究の結果を指します」

近藤氏が言う。「エビデンスとは文字通り『証拠・根拠』であり、ランダム化比較試験に限られるわけではありません。ランダム化比較試験が最上のエビデンスとされているのは確かだけれども、それだけでなくエビデンスたり得る。例えばモルヒネはたった数例に鎮痛効果が見られただけでも、確実なエビデンスたり得ますし、今それを疑う人はいません。」

新潮の記事を読むと、大場さんは『エビデンスとは「ランダム化比較試験」で

ある』と狭く定義することにより、僕の発言に問題があるかのように見せかけているように感じます。ちょっとズルいですね(苦笑)。対談で確認したのは次の一点でした。『早期胃がんが手術で延命できるというデータがない事』。ランダム化比較試験の有無を問題にしたではありません」

これは今回の対談に限らず、近藤氏の現代医療に対する基本スタンスだ。「切らなくてもいい不要な手術をしている」、「意味のない検診が、治療が不要な患者の掘り起しに繋がっている」――。いずれも、医療の常識に対する問題提起であり、近藤氏は「もし自分

氏が言葉に詰まるシーンもあった。紙幅の都合で記事には掲載していないが、近藤氏が否定的な立場をとる抗がん剤の分子標的薬「パニツムマブ」について議論を交わしていた時の事だ。

「資金提供を受けている者がいるのは事実です」と述べ、そのうえで「『いいデータ』なんて意図的には作れない」とも語っている。新潮での「後出しジャンケン」について大場氏に聞くと、「新潮の通常の取材を受けた、というだけですので、私からは特にありません」と語るのみだった。

近藤氏が言う。「対談や新潮の記事では、手術にメリットがない事の説明義務がある」と語る事により、放置でどれほどの治癒が見込めるのか、僕に対して説明を求めていますね。医師が(近藤氏側に)証明責任を転嫁しようという意図が込められてい

る。大場さんだけでなく手術医全体が、証明責任という言葉にナーバスになっていることが分かります。なぜならエビデンスがない事こそが彼らのアキレス腱だからです。

証明責任という言葉にナーバスに

近藤氏 臨床試験は、研究者が将来の患者の為の代理人となつて行います。この代理人が、薬が承認された時に利益を得る製薬会社と何らかの関係があつたとしたら、利益相反になる。大場氏 それは我々の世代が学んで来た教育でも、絶対あつてはならない事と認識しています。

あなたの本を文藝春秋で作りませんか？

自費出版のご案内

一冊の本を作るには、手間ひまがかかります。全体の構成、原稿の整理、文章の校正、装丁等々。当然それなりの経費がかかりますが、必ず、ご満足のいただける「あなたの大切な一冊」をお作りします。

- 誰に読んでもらいたいかを一緒に考え、原稿の完成度を高めます。
- ずっと残るものだから、手抜きのない編集制作をします。
- 文藝春秋の刊行物として品質を保つため、刊行点数を制限しています。
- 書店での流通をご希望の場合には、販売委託制度がございます。

文藝春秋企画出版部
〒102-8008
東京都千代田区紀尾井町3-23
TEL 03-3265-1211(代表)
FAX 03-3265-1257
http://www.bunshun.co.jp/kikakushupan/
● 図書館での原稿作成もお引き受けしています。
● 詳細は上記ホームページもしくは一度ご連絡ください。
詳しい案内書をお送りします。